

ロイヤリィクラブとは

大阪商ロイヤリィクラブ  
備報委員会



### ロータリーの使命概要

一般に日本でロータリーへ行って来ると聞くと「エライ人達の飲食会か」と言った感じの言葉を聞いたり、又受けとられている一面が未だにある。何かエリート階級の社交クラブ位に取られている向きもある様であるがロータリアンに取っては誠に迷惑千万な事である。

然し今日迄のロータリーの行き方には誤解される様な点があつたかも知れないし又好ましがらざる批判を、屢々耳にすることがある。けれ共ロータリーの本質には左様なものはないのであり、お互ロータリアンが忠実に其綱領を實踐するならば、エライ人達の飯食会等の誤解を招くことは無い訳である。

ロータリーは実に健全で世界的な友好と奉仕を志す人々の団体であつて、社会生活、職業生活の幸福の基をなすものは「奉仕の理想」と言う自覚の許に集つて居る会員を以て組織されているのである。

ロータリーでは此の「奉仕の理想」を自己職業の上に顕現し様と言う丈でなく、全世界の人類に迄及ぼし以て住みよい和かな社会にし国際的に相提携して世界平和に貢献し様と言うのである。

従而、ロータリーは秘密結社でも、宗教団体でも、又政治団体でもない。ロータリーの奉仕の綱領は全ての宗教と抵触しないし、又会員の政治上の立場とは無関係でもある。若し会員の中に政治家があつても其の人の政治上の立場とは全く無関係で、ただ其の人が政治に対して忠実である事を期待するのみである。

このロータリーの精神に依つて強く結ばれた会員が目ざす所は互に其友好関係を拓めて行く丈でなく、社会改善の事業に積極的に参加協力し、職業生活の水準を高め、且つ国際間の理解、親善、平和を促進する實際的手段を進んで提供し、其実現に向つてあらゆる奉仕をおしまないと言う事である。

勿論会員は毎週一回定例会合をして食事を共にするのであるが、其の奉仕活動の範囲は広いのである。即ち、青年男女の指導、社会福祉の増進、或は職業進展に関する各種運動の良き助言者となり、援助を惜まず活動を行なう事等である。

ロータリークラブでは其会員選定を一業種又は専門的職業で一人を原則として居り、其事業或は専門的職業で其地域に於ける定評のあるものでなくてはならぬ事になって居る。それは其の地域の経済活動、社会活動の一断面たらしめる事を目指して居るからである。故に会員は各自の仕事を通じて社会に奉仕する事を各自の信条としているものである。

更にロータリークラブが他の団体と異なる点は、こゝに一つのクラブが設立されると、それは全日本に存在している他の総てのクラブに密接に結びつけられ全日本のロータリークラブと一体となり、そして他のクラブへ出席する事も出来れば又他のクラブの会員の訪問も受ける。全く帯紐解いての交友が出来る訳である。然もこれは日本全国丈ではなくて今や全世界で149ヶ国の地域に約一四、〇〇〇のクラブと七〇万以上の会員とも全く同様の関係に置かれてここに国際ロータリーが生れるのである。

## 国際ロータリー

全てのロータリークラブは国際ロータリーの名称の許に世界的に組織化され、有機的結合の許に其の機能を昂める仕組みになって居り、其の本部はアメリカのシカゴにある。

この国際ロータリーは毎年、年次総会を開いて理事を選出して、その理事会に依って運営されているが運営上世界を八六の地区に分け、各地区は夫々の地区ガバナーに依って指導監督されている。各地区に於ても毎年年次大会を開いて交友を温め、相互の連絡や運営上の問題を討議してゆくのである。

世界中の会員が人種と国境を超えて互に交信し、会合し、歛談して親交を重ねると共に襟に付けた金バッヂから旅先で個人的に親しく交際が始められたり、或は他の国の歴史や経済文化の研究等という事で国際間の理解、親善を増して平和の促進に協力し合う事になるのである。斯様な事は他団体では見られない事で国際ロータリーの誇りと言ふべきであろう。

## ロータリーの歴史

ロータリークラブは一九〇五年二月二三日アメリカのシカゴに生れた。当時経済恐慌で人心の荒れすさんで居たアメリカ社会、特にシカゴの状態を憂えた青年弁護士ポール・P・ハリスが、職業の異なる三人の同志と語りつてその仲間達が青年時代に経験した、市民生活に於ける親しきとか、理解の深きと言ったものを再び彼等の身近かに感ずる事の出来る会即奉仕の精神に依って人の和を図る事こそより良き社会を造る事になると信じて会を組織したのが其出発である。そして彼はこの理想を広く呼びかけて代表的実業家、専門的職業人の一団をまとめた。ロータリークラブと命名したのは最初会員達が持ち回りで順番に各自の仕事場を集会場として開いたのでロータリーと名付けられたのである。始めの内はそれでやれたが次第に会員が増加して会員達の仕事場では狭くなったので毎週一定の場所で昼食の

テーブルを囲んで会談する様になったのである。

一九〇八年には「シカゴクラブ」の一員であるマニエル・モッツが「サンフランシスコ」の若い法律家ホーム・ウッドの共鳴を得て世界で二番目のロータリークラブを組織し、更に友人と提携して第三番目を「オー克蘭」に第四番目を「ロス・アンゼルス」に設立するに至った。

次で一九一〇年には米国に十六のクラブが組織され同年八月「シカゴ」に於て連合会を開いて定款を設け、本部役員を選挙したのである。

一九一一年八月には「ポートルランド」市に第二回連合会を開催し機関雑誌の発刊を決定した。

続いて一九一二年八月ミネソタ州ズルスに於ける第三回連合会は一変して国際連合会となり「イギリスのロンドン」。「カナダのウイニベグ」両地の加盟を可決して次第に全世界に向けて発展していったのである。

次に「国際ロータリー」の名を採用するに至ったのは一九二二年の「ロス・アンゼルス」に於ける国際連合会に於て定款を改めて採用されるに至ったのが最初である。

これより先一九二〇年（大正九年）故米山梅吉氏が中心となって同年十月東京ロータリー・クラブが設立されたのが日本に於けるロータリー・クラブの始まりで、世界では八五番目に当り、続いて大阪、神戸、京都、名古屋、横浜等の大都市に設立される様になり戦前の昭和十五年にはクラブ数四八、会員数約二千名を擁していたのである。

然し乍ら日華事変から太平洋戦争に突入するに及んで国際的団体に対する圧迫きびしく、遂に昭和十五年日本ロータリーは心ならずも国際ロータリーから脱退するのを止むなきに至った。然し脱退はしたものの各会員の持つ奉仕の理想と其組織は微動だにせずロータリー精神の伝統を守り続けたのである。

終戦後旧ロータリアンはロータリーへの復帰を念願してやまなかったけれ共敗戦日本の悲しさ、何一つとして国際

的活動は許されていなかった。しかし已むにやまれぬこの念願はバラバラではあるが地域毎に次第にクラブが結成され、木曜会とか、水曜会とかの名に於てロータリー精神の發揮に努めつゝロータリーへの復帰を待望していたのである。

然る所一九四九年（昭和二十四年）二月、国際ロータリー理事会は日本の復帰を決議し正式加盟を認めたので同年三月東京・大阪を始め全国七つの主要都市にロータリー・クラブが承認されて復帰再出発を見たのである。

此れを契機として逐年全国各地に顕著な効果をあげて続々と其復帰を見ると共に新クラブ結成に熱意がみなぎったのである。

これぞ奉仕こそわが努めとするロータリー運動が旺盛となり斯くて今日では国内十八の地区に二〇七九のクラブと五四、〇四三名の会員を数えるに至ったのである。

この全国に分布されたクラブが一体となり更に更に国際的に一四九ヶ国一五、〇四四のクラブと深く強く結ばれてその世界的友誼に依って国際間の理解と友情と平和の促進に重要な役割を果す事は誠に喜ばしい事である。

このロータリーの進展を単にクラブの増加と会員自体のロータリー精神に生きるに止めず、其綱領精神を一般世間の人々に押し拡め社会を明るくすることに意義を見出して行きたいものである。

## 奉仕の理想

奉仕の理想とは何を意味するか、「ロータリーの意義」の著者はこれに関する種々な言説を引用している。夫々言

業は異なるが精神は一つである。

エヂプト人曰く 『己の欲する善を他人の為に求めよ』

仏陀 曰く 『人は己の為に欲する福善を他人の為に求むべきものなり』

孔子 曰く 『汝の欲せざる所を他人に施すなかれ』

モハメッド曰く 『何人も己の好まざる如く同胞を遇すべからず』

最後に

イエス 曰く 『汝 他人より与えられんと欲するすべてを他人に与えよ』

等 奉仕の理想を奉ずる人々は、富は正しき用益を有せぬと信ずるものであろうか？。答は言うまでもなく 否である。

ロータリーの概念する奉仕の理想とは、物の過程の最初に奉仕を置くものである。奉仕の理想を標榜する者は、受くべき物質に於てせずして先づ与うべき奉仕に着眼すべきである。

初期の奉仕概念に就て考うるに、初期の「ロータリー」は会員の相互扶助から始まった。この中には、会員が互に取引を行なうという「物質的互恵主義」の立場と、会員が例会に職業上の問題を持込むという一種の「話合運動」の内容とする「精神的互恵主義」の立場が含まれていたのであった。

したがって、「クラブ」の一般的性格である「親睦」——たゞ仲良くすること——の要素もロータリーにおいて重要なものではあったが最初の時期に於ては兎も角、一九〇八年頃からは、むしろ「親睦」は、ロータリーに於ては、より高次の対社会的目的を達成する為の下地乃至土壤と考えられる様になったという事である。此の様な態度の変化は「物質的互恵主義」にも影響を及ぼし、ロータリーが職業人の親睦を基礎として、より高次の対社会的目的を達成

すべきであるならば、会員相互間の取引は、ロータリーの本質をなすものではなくして、寧ろ、ロータリーの附随的出来事であるとされる様になったのである。

此の様に於て最も初期のロータリー運動は、その最初の暗中模索の中から、「話合運動」を主軸とする「精神的互恵主義」を残し、これを一般概念としての「奉仕」Serviceと名付けたのである。時に一九〇八年のことであった。しかし、この様な「一般的奉仕概念」には、上述した様な、ロータリー的と呼ばれる枠——職業上の精神的互恵主義——が存在したのだが、このときにはこれを今日呼ばれる様な

職業奉仕 (vocational service) 国際奉仕 (international service)

社会奉仕 (community service) クラブ奉仕 (club service)

等という概念への分類はまだなされていなかった事に注目しておかなければならない。つまり、何処迄が「職業奉仕」で何処迄が「社会奉仕」か等と探究に憂身をやつすよりは、先づ「奉仕」というものは一つであること、それに、ロータリアンであるからには、ロータリーの立場で、より高次の対社会的活動を行なわなければならない事を理解し、これさえ行なっていれば、即融通無礙の「奉仕」であると自覚する必要がある。

一九一五年頃における「奉仕概念」の中で、はっきりと自覚されていない奉仕の分野が一つあった。それは「国際奉仕」である。このことは当時のロータリー運動の実態とも関係のあることなのであろうが、これは、ロータリアンがより高次の対社会的活動を行なうに当って、家・職場・地域社会・国家という順で問題意識を發展させながらも、国家以上にわたっての奉仕活動に手を染めることに、実効性の点から、若干の逡巡をしていたし、またせざるを得なかったことによるのであろう。

然し、ロータリー思想の中には、この逡巡を吹き飛ばす丈の強力な要素が含まれていた。それは、世界各国に於け

るロータリー運動の発展と、それに伴う「奉仕活動」の活発化である。現に一九一〇年に「カナダ」のウイニペック・クラブが出来、一九一一年に英本国にロンドン・クラブができ、一九一六年にはキューバのハバナ・クラブができるという有様で、このような状況の中で、一九一四年に第一次世界大戦が始まったのであるが、ロータリーは必然的に避難民救済と傷病兵の慰問活動を行なったが、実は、人間性に直結するこのロータリーの奉仕活動から、ロータリーは歴史的に民族間に存在していた感情的対立を氷解させ、更にはこの相互理解が戦争を防止し、人類平和を確立する重要な役割を果たすという自覚が得られたのであった。つまり、ロータリー発生の当初の「話合運動」の要素はここでも、国際間の問題を国家の武力行使に依って解決する方法の否定という点で、その神通力を発揮したのである。この様な実践活動を通じて一九二一年のエジンバラ大会は、ロータリーの奉仕に「国際奉仕」の分野を付加すべきことを決議し、これが翌年即一九二二年のロサンゼルス大会の標準クラブ定款に書き加えられることになったのである。

ロータリーが「国際奉仕」の分野を発見したことは、単に奉仕の分野が拡大されたにとどまらなかった。それは、端的に言えば、「世界は一つ」、「人類は一つ」という思想的認識をロータリーにもたらした。ロータリーに国籍はない。ロータリーに人種はない。従って、ロータリー・クラブが直接的には地元社会で行なう奉仕は、如何なる種類の奉仕であろうとも、またどんな些細な奉仕であっても、それが、やがては、世界の隅々まで何らかの影響を及ぼすという認識に立って奉仕活動を行なうとともに、「国際奉仕」の分野では、ロータリー・クラブはその地域性を超えて全世界の問題を直接自己の問題として考えるべきことを各ロータリアンに命ずる原則が生れ出るに到ったのである。この自覚を一言で表わしたものにラハリー会長による「世界は狭くなりその片隅で起きた事件でもたちまち世界中に影響する今日、何処かに不幸な者のある限りみんなは幸福になれない」という言葉があるが、これは単なるセンチメンタリズムの表明ではないのである。まこと、ロータリアンはその独特の責任を自覚し因縁を大切にせねばならぬ。

即

- (1) ロータリーは会員個人としての奉仕の他、クラブ名を用いる団体的奉仕を行なう。
  - (2) 団体的奉仕を行なうに当っては最も慎重な態度を採らねばならぬ。
  - (3) 地域社会に存在する専門事業団体があれば、これに援助を与え、自ら奉仕活動を行なってはならない。
  - (4) 政党がその態度を打出した様な問題に就ては、クラブは決議を行なってはならない。
- これ等は何れも今日の「社会奉仕」の一般原則として考えられているものではあるが、一九二三年のセント・ルイス大会の「決議」迄は全世界のロータリーの全般の慣例としては若干の不明確さを残しつつ各クラブの活動が行なわれていた様である。

此の当時各クラブの態度は二つに分れていた。その一つは、ロータリーは職業倫理向上の為クラブ活動を行なう事を目的とする団体であるから、社会奉仕を行なうに当っても、その許容限度は極めて限られたものであって、その許容限度とは各個人たる会員の奉仕活動であるとした。

いま一つの態度は、ロータリー・クラブが奉仕クラブであるならば、社会的救済を求めている者に対して直接クラブの名に於て救済を行なわないで、「何の奉仕ぞや」と言うのである。現に、この分野では、一九一二年以降ニューヨーク州のシラキューズ・クラブ及オハイオ州のトレッド・クラブ等で身体障害者養護問題と取組み、相当な成果を挙げたので、これ等のクラブはその実績に基づいて、その態度を改め様とはしなかった。そして此の対立を解決したのが一九二三年のセント・ルイス大会であり、その時の決議として

- (1) 各ロータリー・クラブはそのクラブの運営に当り、完全な自主独立性を有すること。
- (2) 各クラブは、他クラブの経験を無視・軽視してはならない。

ことが定められたのであった。この様にして今日の「社会奉仕」についてのロータリーの基本原則たる、クラブは団体的奉仕と個人的奉仕の何れをも自主的に決定し、これを行なうという原則が確立したのである。

初期のロータリー哲学：—

今日のロータリーに於ても言える事であるがロータリーの内部にはロータリーの何たるやに関して大きく分けて二つの哲学論と一つの非哲学論が存在する。

非哲学論と言うのは、ロータリーを以て、本質的に「親睦団体」と考え、本来「おつき合い」なのであるから難しい理屈をこねないで、要するに楽しくやろうと言う立場である。

この立場は、ロータリーを以て業界代表者達の社交団体なりと考える人達に依って暗黙裡に承認され、必要以上にロータリーを「簡素化」したが、地域社会との密着度がロータリーの根本原則であることを無視し、社会奉仕よりはクラブ運営の派手さをほこり、企業経営に対する「話合い運動」の重要性を忘れて、全ての経営管理面に非ロータリー的方法を用い、ただ「バッヂ」許りを誇示して、これを以てエリートの特徴と考えるものである。

此を要約すれば、自己企業の発展のみに終始する人達の交友団体の如きもので常に儲けの金高をほこり、そこに至る迄の精神労働の価値を考えないものである。

戦後のロータリアンの中には、これに属する人が相当数あると指摘しているロータリアンのある事は御互いに反省せねばならぬ事である。

ロータリー哲学論：

二つの立場：—

哲学論というのは「奉仕の哲学論」もつと正確には「職業奉仕の哲学論」である。これを端的に言えば常任坐臥・

自分のおかれた状況に於て自分の行動を具体的に決定し様とする場合「ロータリーは自分に対していかなる行動を命ずるか」を問う生活態度である。即、ロータリーと人生が直結している人の事である。そしてこれ等の人達は、日常生活の場を通じて幾多の思考上の反省を行ない。その思索と疑問点をたづさえて例会に出席し、親睦のうちに、他の会員と明示又は暗黙裡に交換するのである。ただこの立場に立つ人の中にも「ロータリーは何を命ずるか」を決定する原理の中の力点をどこに置くかによって、二つの対立が生れて来る。

ロータリーの哲学は、職業という利潤獲得を目的とした利己の為の活動が、どの様にしたら利他になるかの反省なのである。その中心概念は利己対利他、利己対博愛の対立を、どこで融合させるかという問題に帰着する。

人は誰しも自己の労働に依って生きなければならぬ。時には労働をそのままの形で売り、これを賃金と交換する。また時には労働を原料に投下して一定の製品を作り、これを一定の代金と交換する等千差万別な労働の投下から、人は金銭を得て生きなければならぬ。この本来利己的な活動には良心的なものから偽善的なものまで、多種多様なものがあるが、ロータリーはその哲学に於て、利己中心又は利他中心のいづれを選択せんとするのであるか、ロータリーは二つの対立をその内部に生み出すのであるが、これは、どちらかと言えば、同一世界観の内部の対立なのであって、本来異質なものの対立ではないのである。

第一の立場：—

一つの立場は、ロータリアンに対して、高度な職業倫理を追求し、職業倫理の是認する労働投下のみを要求する。その職業倫理上は認められる労働投下を以て正当な労働投下と考えるのである。

即この立場からすれば利己と利他とは、職業倫理の是認する労働投下によって、その対立を調和されるものと考えられる。ただし、職業倫理は労働投下者に対して、当該労働投下がその相手方をも利することを要求するからである。こ

の立場を明確に打ち出したものに、一九二三年のセント・ルイス大会決議の際の有名なシェルドンの標語「奉仕に徹する者に最大の利益あり」がある。

即「根本問題として、ロータリーとは、自己の為に利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕し様とする義務感とそれに伴う衝動との間に常に起る葛藤を調和させ様とする人生の哲学である」と

## 第二の立場：

いま一つの立場も、この第一の立場と同一基盤に立ち乍ら、更に一步進めて次の点に対して対決を挑むものである。若し万一この利己対利他の対立がその極限に於て、利他利己共に譲らざる關係に立たされた時、即、ロータリアンが利他を否定して利己を生かすか、又は利己を滅して利他を生かすかの何れか一つを絶対選ばねばならない状態に追い込まれた時、ロータリーは一体どちらをとることを命ずるかと問うのである。

シェルドンや前記の決議は、ここに至って利他を捨てざるを得なくなると言うよりは職業倫理上是認せられる利己活動を以て、その任務終れりとして、黙して語らないであろう。そして又この様な事態に対して彼等はロータリーは職業倫理主義であつて宗教ではないとも言うであろう。

然るに今一つの立場の人達はこのような事態に対しても、ロータリアンは利他に徹して、利己を滅せよ、と説こうとする。

ロータリーがその初期の伝統形成の時期に於て、その哲理の追求に當つて、この立場を自己の世界とし様とした人が何人かいた。

その最初の人物がミネアポリス・クラブの会長フランク・コリンズであつてその標語「奉仕だ、私利私欲ではない」  
Service, Not Self はまさにこの立場の表明なのである。

又一九一二年の国際ロータリーの初代会長 グレン・C・ミードが「ロータリーは利他的精神で経済的目的を遂げ様とする実業家の組織でキリストの教えと社会正義の線に沿つて商行為を導こうとしている」と言っているのもこの立場をとるものと言える。

又一九一五年のロータリー倫理訓の中で、この倫理訓の根本理念は愛であつて、他を滅ぼさんよりは他に滅ぼされん事を欲するものである。とまで説いているのはこの事を意味するものである。

この様に崇高に昇りつめた精神世界のロータリーは、実業倫理の世界を超えて、宗教の世界——即ち自己滅却の世界——に入ったのではないかとも考えられるのであるが、この点は、どちらかと言えば個々のロータリアンがその個人的修養を積んで得た窮極的境地の問題として尊重さるべき課題ではあつても、どのロータリアンにも期待出来る世界ではないのである。

この様にして、今日の世界に於ても、優秀なロータリアンの中から、この様な言説を聞くし、またロータリー精神を禪又はキリスト教の教説を柱に説く人がいるが、ロータリーは其の純化された世界においては此処に辿りつくものであり、また修業の末ここ迄辿りつけば無上の幸せ——個人的にも、ロータリーのにも——なのである。そしてこの事は東洋的精神文化の極度に発達した吾が日本国社会では、特に重視されねばならない。それは、吾国ではロータリー以外の一般社会に、すでに、極めて崇高な精神的奉仕を實踐できる人達が沢山おり、またロータリアンの中でもロータリー理論など知らぬふりをして奉仕活動をしている「隠れたロータリアン」が多いのである。

只この極限の境地を全世界のロータリアンの一般的義務とする事が出来るかと言えば、否である。ロータリーは宗教ではなく、実業倫理主義を説く団体活動である等と言われるのは、実はこの純粹主義の頂点の部分を、ロータリアンの義務の中から削除すべきだと言う主張なのである。



併し一般的義務として考えられないと言う事は、この境地に達してはならぬという意味ではない。一般的にそこ迄期待はしていないと言う丈の事なのである。この事は特に強調しておかなければならない。

一九一五年の倫理訓については、その内容が宗教的色彩が強いと言う事で国際的ロータリーは自発的にこれを配布する事をやめ、各会員の要請のあった場合これを配布するという事になったし、コリンズの「奉仕だ・私利私欲ではない」という標語もシカゴ・クラブの討論にかけられ、この標語は奉仕に対する自己否定が強すぎるという意見から、すぐれた自己確立こそロータリーの前提であるとする意見に基づいて「奉仕第一・自己第二」 Service, Above Self と変えられたのである。

ロータリーに於ける「名誉会員制」もその理論的根拠なしと強く否定された意見の出た事もあるが、その後ロータリーの正規の制度として認められたが、国際ロータリー理事会は、この制度を軽々しく運用してはならないと決議しているのであるが、この辺の変化を物語っている様である。

又「ロータリー理論委員会」といういかめしい名称も「ロータリー情報委員会」と言う日本的な肩のこらない名称に変えられたのも決してこの動向と無関係ではない様である。

次に倫理訓に対する国際ロータリーの態度の変化は、その哲学そのものを否定するものでなく、況んや、ロータリーは単なる「親睦団体」ではないのである。それは一般会員に対して依然として親睦を歯車として噛み合わせた「奉仕哲学」を要求するし

1. 職業分類
2. 一業一会員制
3. 例会出席

を軸とするクラブ活動が如何にして地域社会と密着し、且その小さな善意が、やがて、どの様にして世界に密着することが出来るかについての探究を一人一人のロータリアンに要求するし、その探究の過程に於て、各会員の精神的世界の進歩状況如何によって前記の境地に到らざるを得ない事になるであろう。

## むすび

最後に「奉仕哲学」の精神主義が強調されると、どうしても「親睦」が軽視される傾向にある。併しロータリーの「奉仕哲学」は、あく迄「親睦」を出発点として醸成されるのである。「奉仕」と「親睦」とは決して相反するものではないから、「親睦」決して前記の「第一の立場」・「第二の立場」とのいづれとも相容れないものではない筈である。

ロータリーの理念や原則で唯一最高の絶対的単一概念がないのはロータリー思想の根本的特徴であるが、ここでも「奉仕」と「親睦」という大きな歯車がガッチリと噛み合わされていないなければならないのである。

つまり、ロータリーにあっては先づ「親睦」の歯車を廻転させこの動力を「奉仕」の歯車に伝えなければならないのである。

(おわり)